

看護学生の学習体験に影響を及ぼす因子に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 交野, 好子, 高島, 真理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/105

[研究論文]

看護学生の学習体験に影響を及ぼす因子に関する研究

Analysis of Dominant Factors in How Nursing Students Learn about Nursing

交野 好子・高鳥真理子

I. はじめに

わが国における看護教育の大学化は1952年の高知女子大学の看護師養成コースから始まり、翌年に東京大学医学部衛生看護科など4から5大学という期間が長く続いた。1993年までの40年間で設立された大学は教育学部看護特別専攻を加えて10大学にすぎなかった。その後は、毎年10大学程度増加し続け2012年には200大学におよび、看護師の資格を取得する学生数は1万6000人を超える等、看護の教育環境も大きく変化した。

その一方、大学全入時代と言われるように、大学に入学することが目的であったり、卒業後の就職の保証が目的であったりする学生が増加してきているのも事実である。また、大学教育に移行しても国家試験受験資格修得単位は専門学校と変わりなく、厳しいカリキュラムの中で教育が行われている。

こうした約20年間の看護教育の大学化は、真に看護教育の「質」を、ひいては看護の「質」を向上させることに貢献してきているのか否かを検証する必要がある。そこで本研究では、看護を学ぶ学生の①背景や自分もっていた看護に対するイメージと現実のズレをどのように捉えているのか知ること、②教室内学習（講義・演習を指す）や看護教育の特徴であり重要な位置づけにある実習の学習効果をあげるためにはどのような方策があるのかを明らかにすることをねらいとした。その結果を今後の教育活動に活かしていきたいと考える。対象は、福井県内の大学および専門学校に在籍し、看護学を専攻する学生である。学生の学習体験は分析目的により大学と専門学校、および入学時の1年次生と学習を積んだ最終学年次生の比較から検討したものである。

受付日 2012. 5. 1

受理日 2012. 7. 11

所 属 看護福祉学部

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象

研究は調査票を用いた自記式回答方式で行った。対象は福井県内の看護学科をもつ大学2校と看護専門学校5校の1年次生から4年次生または3年次生（専門学校は3年課程）である。対象者数は大学生453名、専門学校生542名である。調査は2011年6月から7月に行われた。

2. 調査方法

調査票は、各大学、専門学校の代表者である教員の意見も取り入れ作成した。調査内容は、学生の属性、看護学を学んでの感想（教室内学習）、実習経験、将来の方向性や目標である。質問項目への回答は「非常にその通り」から「そんなことはない」の4段階の評定評価と多肢選択方法を採用した。4段階評定評価の得点は、分析の目的に添って、平均得点を用いたものと、「非常にその通り」「その通り」4点・3点のグループと「少しその通り」の2点と「そんなことはない」1点のグループに分けて用いた。質問数は合計30項目であった。

3. 分析方法

大学生と専門学校生などの2群間の比較にはマン・ホイットニーのU検定を用いた。看護学の教室内学習に対する感想と実習体験に関する17項目については、実習体験者である大学3・4年次生、専門学校2・3年次生の回答結果を基に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い、学生の学習姿勢や体験に影響を与える因子を抽出した。データの分析にはPASW Stastics19を使用し、有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

調査は各大学、専門学校の代表者の承諾を得た上で、各校代表者または担当教員から学生に説明を行ってもらった。学生用の調査票には研究協力への依頼と「看護者の倫理綱領」等の倫理規定に基づき回答は自由であること、回答しない場合でも不利益が生じないこと、個人情報の厳守等を記載した。また、回答した用紙は封筒に入れ封をして回収した。

Ⅲ. 結果

1. 対象の属性

調査対象および調査票の回収状況は表1に示す通りである。大学生と専門学校生の回収率はいずれも高い割合であった。回収率の内訳は専門学校生が大学生を6.8ポイント上回っていた。男女別では回答者数852名中、男性は100名で全体の11.7%であった。男性の占める割合は、大学生では10.5%であるのに対して、専門学校生は12.7%と2.2ポイント上回っていた。また、年齢では専門学校では25歳以上の学生が106名（22.0%）であるのに対して、大学生は6名（0.2%）と少数であった。

表1 調査対象および調査票回収状況

	対象者数	回収数	回収率	実習体験者数	実習体験者の占める割合
大学	453名	371	81.9%	191	51.5%
専門学校	542名	481	88.7%	302	62.8%
計	995名	852	85.6%	493	57.9%

2. 質問項目別大学生・専門学校生比較

各質問項目について、大学生と専門学校生の平均得点を比較したものが図1・図2である。教室内学習の対象者は全員とし、実習に関しては大学では3・4年次生、専門学校は2・3年次生の回答を対象とした。

大学生・専門学校生ともに、図1の教室内学習体験では、「知識を使って考えなくてはいけなくて大変」、図2の実習体験では「対象者のケアを考えなくてはいけなくて大変」、「対象者と接することで勉強になる」という項目の平均が3.4点以上で最も高い得点であった。最も低かったのは「今は看護を選択したことを悔いている」の項目で、大学生平均1.65点、専門学校生1.46点であった。

教室内学習では「記憶することが多く思っていたより大変」「看護は大変なだけに学びがいがある」「将来進みたい方向や目標がみえてきた」の3項目において大学生よりも専門学校生が有意に高い得点を示していた。その一方、「今は看護を選択したことを悔いている」の1項目は有意に大学生の方が高く、実習に関しては、「実習よりも看護過程等の記録が大変」の1項目で専門学校生の方が有意に高い平均得点を示していた。

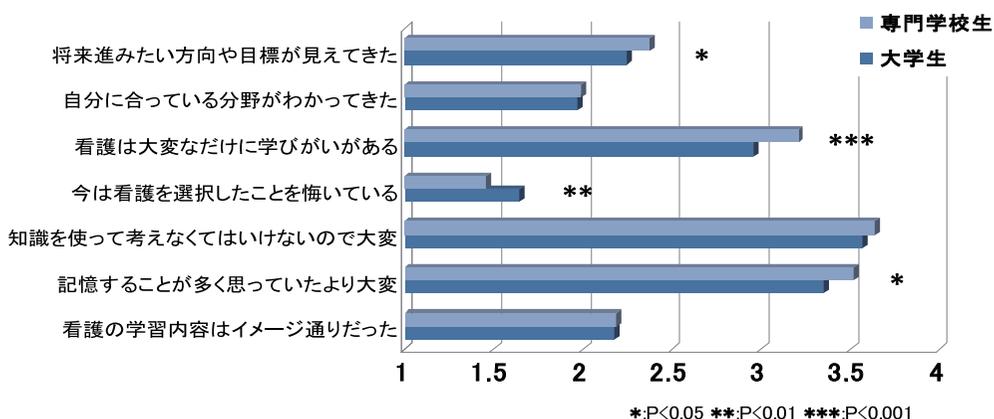


図1 大学生・専門学校生別教室内学習体験

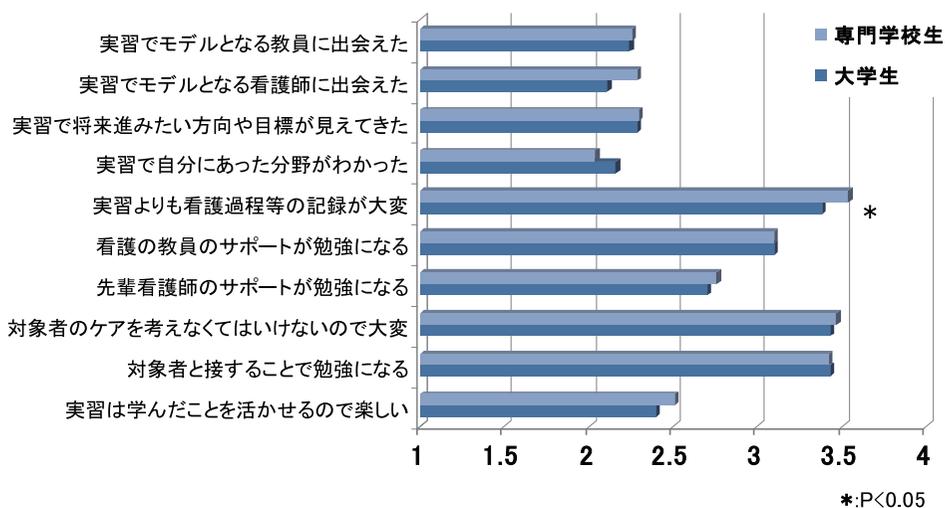


図2 大学生・専門学生別実習体験

3. 質問内容の関連性

質問項目は、教室内学習体験に関するもの7項目と実習体験に関するもの10項目の計17項目であった。これらの項目間の関連性を抽出するため、実習体験者である大学3・4年次生、専門学校2・3年次生の回答結果について因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。質問17項目中の13項目で4つの共通因子を抽出することができた（表2）。因子負荷量が0.4未満の「看護の学習内容はイメージ通りだった」「実習でモデルとなる教員に出会えた」「実習でモデルとなる看護師に出会えた」「実習よりも看護過程等の記録が大変」の4項目は除外した。

因子分析の結果は、第1因子は教室内学習や実習によって自分の進む道、将来の方向性や目標が見えてきたというものであり、「学習によって将来が見える」と命名した。

次の第2因子は、看護の学習、特に実践の場である実習からの学びが多くやりがいがあることを表している。また、看護を選択したことを後悔していないことも認められた。これらを「看護はやりがいがある」とした。

第3因子では、「看護はやりがいがある」反面、看護学を習得することは知識量、実践の経験等、知力・体力・意欲をふるに活かさなければならない。こうした経験から「看護を修得することは大変」とした。

表2 質問項目の因子分析

(最尤法、プロマックス回転)

質 問 項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
実習で自分にあった分野がわかった	0.897	-0.119	-0.050	0.076
自分に合っている分野がわかってきた	0.864	-0.130	-0.003	-0.004
実習で将来進みたい方向や目標が見えてきた	0.782	0.107	0.033	0.013
将来進みたい方向や目標が見えてきた	0.669	0.221	0.040	-0.102
看護は大変なだけに学びがいがある	0.022	0.642	0.034	-0.013
実習は対象者と接することで勉強になる	-0.116	0.626	0.096	0.116
実習は学んだことが活かせるので楽しい	0.164	0.589	-0.070	0.036
今は看護を選択したことを後悔している	0.043	-0.472	0.157	0.070
知識を使って考えなくてはいけないので大変	-0.012	0.021	0.765	-0.039
記憶することが多く思っていたより大変	0.069	-0.039	0.719	-0.011
対象者のケアを考えなくてはいけないので大変	-0.066	-0.067	0.501	0.060
実習で先輩看護師のサポートが勉強になる	-0.013	-0.065	0.004	0.860
実習で看護の教員のサポートが勉強になる	0.044	0.149	-0.003	0.595

第4因子は実習における先輩看護師や担当教員のサポートの必要性を挙げたものである。実習病棟を初めとする学習環境は領域実習の単位数により、2週間あるいは3週間で変わる。したがって、受け持ち対象者はもちろん、病棟看護師等との初めての出会い、場所の不慣れ等、不安が高まる中で実習開始となる。そうした環境の中で学生は適切なサポートを求めていることがわかる。こうした実状から第4因子は「実習でのサポートは重要」とした。

以降は、看護のイメージ、教員や看護師の看護師モデルに出会えたか否か等を独立変数にし、因子分析により求めた標準化因子スコアの4因子の平均値を従属変数として、その関連を明らかにする。

4. 看護に対するイメージと現実の差

近年、看護を志望する学生は高校時代に職場体験である1日看護師を行っている。そうした体験はあるものの、現実には看護師の活動を支える知識・技術等の学習量や時間的制約等は予測できるものではない。大学・看護専門学校へ入学後、最初に描いていた看護のイメージは実際の教室内学習や実習を体験した後、どのように変化したのかを明らかにしたいと考えた。

学生自身が描いた看護のイメージが学習体験を通して、イメージ通りであったか、または、イメージと異なっていたかを問う質問は「看護の学習内容はイメージ通りだった」とした。回答方法は4点が「描いていたイメージ通り」で1点は「イメージと違っていた」ことを表している。これに対する回答は大学生・専門学校生ともに平均得点は2.18・2.19とほぼ同得点であ

った。その割合は、表3に示す通りである。「少しだけイメージ通り」と回答した者は大学生で48.0%、専門学校生45.0%と最も多かった。

表3 看護に対するイメージと現実の違い

	大 学 生	専 門 学 校 生
描いていたイメージ通り	18人 (4.8%)	23人 (4.8%)
ほぼイメージ通り	102 (27.5)	144 (30.0)
少しだけイメージ通り	178 (48.0)	216 (45.0)
イメージと違っていた	73 (19.7)	97 (20.2)
計	371 (100.0)	480 (100.0)

また、看護のイメージは教室内学習や実習によって修正され変化していくのかについて学年別に比較した。その結果、図3・図4に示すように大学・専門学校生ともに1年次生はイメージ通りと感じていたものが最終学年になるにつれてイメージと異なると感じている学生が増えていた。

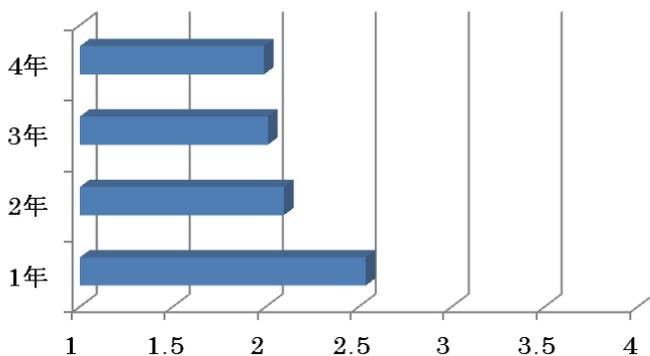


図3 大学生の看護イメージ

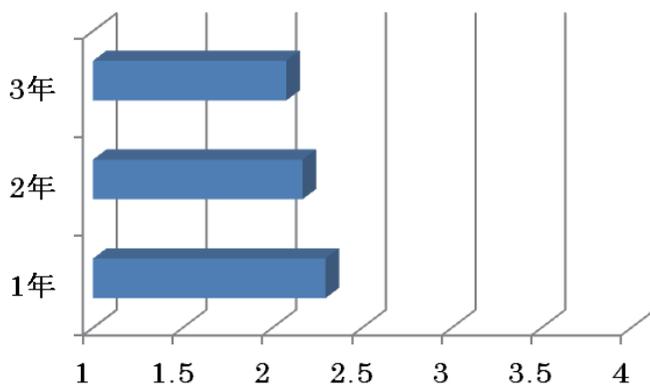


図4 専門学校生の看護イメージ

次に、イメージの相違と抽出された因子との関係を表したのが図5である。データの分析は「看護の学習内容はイメージ通りだった」という質問に対して、「非常にその通り」と「その通り」の4点・3点を『看護イメージ通りだった』とし、「少しその通り」「そんなことはない」の2点・1点は『看護イメージが異なっていた』の2つのグループに分類し比較した。

「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「実習でのサポートは重要」という3項目において看護の学習はイメージ通りだったと感じている学生の得点は高く、イメージと異なっていると感じている学生の得点は低い値であった。「看護を修得することは大変」の項目についてはイメージの相違と関係していないことが明らかにされた。

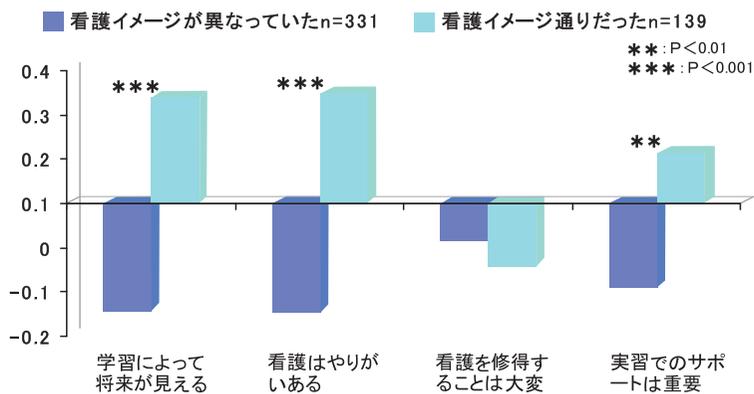


図5 看護イメージと抽出された因子との関連性

5. 教員や看護師の看護師モデルとの出会い

学生が臨床現場で看護師のモデルとなるような教員や看護師に出会えたかについて質問を行った。データの分析は「実習中にモデルとなる看護師（教員）に出会えた」という質問に対して、「非常にその通り」と「その通り」の4点・3点を『看護師モデルに出会えた』とし、「少しその通り」「そんなことはない」の2点・1点は『看護師モデルに出会えなかった』の2つのグループに分類し比較検討した。

『看護師モデルに出会えた』と回答した学生は現場の看護師のモデルは179名、教員の看護師モデルは180名であった。一方、『出会えなかった』と回答した学生はいずれも289名で、看護師のモデルと出会えなかった人は出会えた人の1.5倍を超えていた。

看護師モデルに出会えた学生は、教員と現場の看護師とも、いずれもほぼ同数であった。したがって本項では、教員の看護師モデルを採用した。

図6に示すように『看護師モデルに出会えた』『出会えなかった』という項目と4因子を対比したところ、『看護師モデルに出会えた』学生は「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「実習でのサポートは重要」の3因子において有意に高い回答値を示していた。

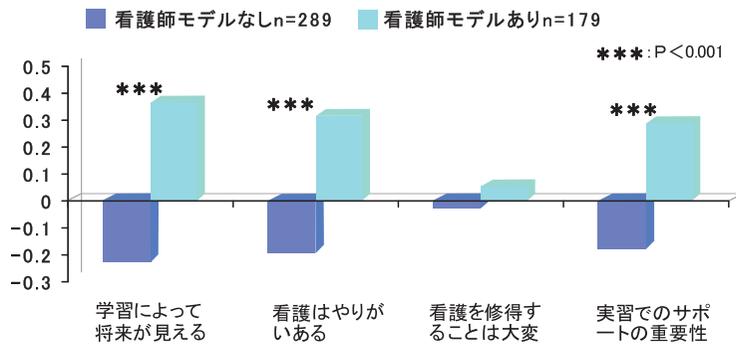


図6 教員の看護師モデルと抽出された因子との関連性

以上の結果から、大学と看護専門学校の学生を比較してみると、専門学校生の方が看護のやりがいや将来の方向性を意識しているものの、知識を記憶することの大変さや実習の記録に苦勞していることが明らかにされた。

このように、看護の学生は大学生・専門学校生とも看護の勉強はやりがいがあると考えていた。看護のやりがいには、学生自身が描く看護のイメージと現実が一致していること、また、実習中に教員や看護師による確かなサポートが得られることや看護師のモデルと出会えることが大きく影響していた。

「看護を修得することは大変」という因子は看護に対するイメージと現実の差にも、看護師モデルに出会ったか否かとも関係していなかった。

Ⅳ. 考察

各項目別に大学生・専門学校生を比較した。大学生は看護を選択したことに後悔している人が専門学校と比較して多く、専門学校生は知識の記憶や記録に苦勞していることが明らかにされた。

また、質問項目の因子分析では、「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「看護を修得することは大変」「実習でのサポートは重要」の4つの因子に分類された。

そこで、本項では看護イメージと因子の関係や看護の特性と学習への取り組み姿勢や体験、実習における看護師および教員モデルの意義と実習体験について述べる。

1. 看護職選択の背景と学習姿勢

1998年以前バブルの時代、看護職に対する社会のイメージは、「3K」(汚い・厳しい・危険)の代表であった。その後バブルが崩壊し、就職難の時代を迎えた。ここ数年、看護職は女子高校生の将来になりたい職業の第1位に踊り出るようになった。看護師の就職者は毎年新卒者と再就職者を合わせて約12万人に対して退職者は14万5千人で、必要数には5万6千人あまり不足している現状にある¹⁾。したがって、看護師にさえなれば就職には困らないことは明らかであ

る。すなわち、看護職の選択にあたっては、大学・専門学校卒業後の就職の安定性に視点が集中するであろうことは否めない。しかし、看護職の仕事内容が変化しただけではない。

大学生と専門学校生の年齢比較においては、大学生のほとんどは高校卒業と同時に看護を専攻しているのに対して、専門学校では25歳以上の学生が全体の2割を超え、最高齢者は45歳であった。つまり、大学を卒業後、または、就職してから進路を変更し看護を選択している学生が多いことがわかる。

以上のような背景を踏まえて教室内学習、実習への取り組みをみると、専門学校生は「看護は大変なだけに学びがいがある」と思っている学生が大学生と比較して有意に多い反面、記憶することの多さや、実習そのものよりも学習を整理し知識と結びつけるための記録等に苦勞している様子が伺える。また、大学生に比較して看護を選択したことを悔いている学生は少ないことが明らかにされた。

2. 看護のイメージと学習体験の関連

病院等に行く機会を得た人々は看護師の仕事ぶりはよく目にするところである。看護を志望する多くの学生は、「インターンシップ」や「1日看護師」等でユニホームをまとい看護師を体験はしている。しかし、看護師になるための学習内容やそれに費やす時間等は想像しがたく、他の学部と同様な内容をイメージしていることが多くみうけられる。大学の卒業要件となる単位数は他の学部と比較してさほど差はみられないものの、1単位の時間数が極めて多いのが特徴である。一般的に教室内学習は1単位15時間に対して倍の30時間の科目が多く、実習においては1単位45時間とされている。

本調査結果においても、大学生・専門学校生ともに、看護の学習内容は、ほぼ自分が描いていたイメージ通りであったと感じている学生は3割強で、少しだけイメージ通りだったと考える学生は半数、全く異なっていたとする学生も2割認められた。また、学習を重ね学年があがるに従い、平均得点は大学生が0.5ポイント、専門学校生0.2ポイント下降していた。自分が描いていたイメージは現実から遠のいていることが伺える。

次にイメージの相違と因子分析の結果である「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「看護を修得することは大変」「実習でのサポートは重要」の4つの因子の関連についてみた。

学生が描いていた看護イメージと現実の学習が一致していると考えている学生は「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「実習でのサポートは重要」の3項目において有意に高い得点を示していた。逆にイメージとの差が大きいほど、学習を積み重ねても将来の目標に繋がらなかったり、看護のやりがいを感じられなかったりしていることが明らかにされた。

前項でも述べたように、学習過程のイメージが不十分なまま、看護を選べば就職に困らないといった動機で入学してきた場合は、やりがいをもって学習することには繋がっていかないと

考える。大学や専門学校での入試説明会等の機会を活用して看護の学習の内容、時間、将来の看護の仕事の意味について、学生がイメージしやすいような情報を提供していく必要があると考える。

3. 看護師としてのモデルの出会いと学習体験の関連

看護の対象と直に会い看護ケアを行う実習は、大学・専門学校ともに最低でも23単位、1単位45時間で計算すると、23週にわたって行われている。また、2週間から3週間程度で実習場所が変わり、そのため移動を余儀なくされている。さらに、受け持ち対象者も変わっていくのが現状である。その間はカリキュラム上、教室内学習は組まれていないことが多い。そうした点からも、因子分析結果が示す通り、学生が看護師や教員の適切なサポートを期待していることはいうまでもない。

それと同時に、臨床実習現場で看護師としてのモデルに出会えることは、看護観の形成や学生自身が考えていることの確信を得る、考え方の幅を広げるなどのきっかけになるという意味で重要である。本調査で、モデルとなるような教員や看護師に出会っている学生が4割に満たないことは非常に残念な結果であった。今回の調査では、いわゆる反面教師と言われる人や事象に出会ったかの質問は行なっていないが、反面教師たる事象は、「こういう事はしてはいけない」「あのようにはなりたくない」ということを感じ、また、考える機会にはなる。すなわち、マイナスの要因として記憶されることはある。しかし、「こうしたら良い」とか「あのような看護師になりたい」といった建設的な学習の機会には到底およばないものである。

次に、臨床実習においてモデルとなる教員や看護師に出会ったか否かと、抽出された因子の関係についてみると、モデルに出会っている学生は、前項のイメージが一致したか否かの回答と同様に、「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「実習でのサポートは重要」の3項目において有意に高い値を示していた。実習における先輩看護師や教員のモデルの存在は、何にもまして学生の看護の学習に有益であることが明らかにされた。

実習場で学生を受け臨床実習指導者をはじめ多くの看護職者は学生とどのように関わったらいいか、何を教えればよいかと真面目な看護師ほど悩むことが多い。しかし、本研究結果で明らかにされたように、学生にとっての最も効果的な学習支援は看護師としてのモデルを実際の現場で示すことにあるといえる。

病院を例にとってみると、多くの場合は、教員が学生への直接的な教育のために看護現場に同行する。しかし、教員は病院組織の職員ではない。病院に入院されている対象者は病院職員である看護師からケアを受けることは言うまでもない。医療事故等の発生時の対応も他組織の看護師では困難なため、教員は対象者の看護に直接的には携われないシステムになっている場合が多いのである。こうした状況では、教員はモデルとなるような看護師としての力を発揮する機会が得られにくいのである。看護教員も看護師としての確かな力を持つべきことはさるこ

とながら、こうしたシステムについては今後検討していかなくてはならない課題と考える。

V. 結論

看護を選択する学生の志望理由は、一般的には人の役に立ちたいというものが多く、近年は、看護師の資格取得後の就職の安定性が選択動機に大きな位置を占めていることは否めない。

大学生のほとんどが高校卒業と同時に看護を専攻しているのに対して、専門学校では25歳以上の学生が全体の2割を超えていた。専門学校生は「看護は大変なだけに学びが面白い」と思っている学生が大学生と比較して有意に多い反面、記憶することの多さや、実習そのものよりも学習を整理し知識と結びつけるための記録等に苦労している様子が伺えた。

また、看護に対するイメージと実際の相違についてみると、大学生・専門学校生ともに、看護を学んでみてほぼ自分が描いていたイメージ通りであったと感じている学生は3割強で、全くイメージと異なっていたとする学生も2割に認められた。イメージの相違と因子分析から抽出された4つの因子の関連についてみたところ、描いていた看護イメージと現実の学習が一致していると考えている学生は「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがいい」「実習でのサポートは重要」の3項目において有意に高い回答を示していた。

このことから、大学や専門学校での入試説明会等の機会を活用して看護の学習の内容、時間、将来の看護の仕事の意味について、学生がイメージしやすいような情報を提供していく必要があると考える。

学生は、臨床実習現場では看護師や教員の適切なサポートを期待している。一方、モデルとなるような教員や看護師に出会っている学生が4割に満たないことは非常に残念な結果であった。

臨床実習においてモデルとなる教員や看護師に出会ったか否かと、抽出された因子の関係についてみると、モデルに出会っている学生は、「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがいい」「実習でのサポートは重要」の3項目において有意に高い回答を示していた。実習において先輩看護師や教員のモデルは、何にもまして学生の看護の学習に有効な教育になっていることが明らかにされた。

臨床実習現場では最も効果的な学習支援は看護師としてのモデルを学生に見せることにあるといえる。

VI. おわりに

本研究は、看護という専門職業を大学および専門学校で学ぶ学生の背景や、学生自身が描いていた看護に対するイメージと実際に看護学を学んでのズレが学習体験にどのように影響しているのか、また、教室内学習や実習の学習効果をあげるためには、どのような因子が関連しているのかを明らかにすることを目的に行われた。

対象は、福井県内の大学および専門学校に在籍し、看護学を専攻する学生995名である。回収は852名の85.6%であった。

質問項目に関する因子分析の結果は、「学習によって将来が見える」「看護はやりがいがある」「看護を修得することは大変」「実習でのサポートは重要」の4つの因子に分類された。多くの学生は看護の勉強は大変だけどやりがいがあると感じていた。看護を選択した場合は、入学後、教室内学習、実習体験ともに厳しいものが求められる。そうした学習を支えるのは実習での先輩看護師・教員の適切なサポートと看護師・教員による看護師モデルとなるような人に出会うことであった。

謝辞

本研究にあたり調査にご協力いただきました学生の皆様、教育機関を代表する先生方に感謝いたします。

引用文献

1) 厚生労働省「第7次看護職員需給見通しに関する検討会」

参考文献

- 南裕子編著 「大学教育の目指すもの」 Part1 看護教育 Vol35.No10 1994.
南裕子編著 「大学教育の目指すもの」 Part2 看護教育 Vol35.No11 1994.
竹信三恵子著 「ルポ 雇用劣化不況」 岩波新書2009.
宮本美沙子他著 「やる気を育てる」 有斐閣新書 1983.
波多野諠余夫他著 「無気力の心理学（やりがいの条件）」 中公新書1981.
斉藤孝著 「教育力」 岩波新書 2008.
畑村洋太郎著 「失敗学の法則」 文藝春秋 2002.
社団法人福井県看護協会著 「福井県ナースセンター事業のまとめ」 2010.